

ねじりはちまき

4月 卯月 清明 穀雨の月になりました。
4月5日 清明です。6日 春の全国交通安全運動で、15日までです。
20日 穀雨。29日 昭和の日で旗日です。

桜花爛漫の候、という季節になりました。
現在、全国で見られる桜のほとんどは染井吉野という品種ですが、江戸時代末期に、いくつかの桜をかけ合せて作られたものなのだそうです。
それが今、全国に咲いています。
その他の品種としては、1番早く2月下旬頃に咲く寒桜、3月下旬頃に咲く江戸彼岸桜、または伊豆の大島に多く見られる大島桜、山桜などがありますね。

本当に良い季節になっているのですが、たまには寒の戻りの様な冷え込みにせっかく片付けたこたつをまた引っ張り出す、などの様なこともあります。
お気を付けて下さい。

幸田 常一



郡山市の現場が続いておりますが、間もなく完成いたします。
先月より、二本松市の現場でグループホームの建設工事をお世話になっております。
こちらの現場は6月頃までかかるようです。

これまで何回か「自然」について取り上げたが、今回は「自然と人間」というテーマで改めて考えてみたい。つまり、我々は日常的に自然をどれだけ意識しているかということなのだ。余り意識していないといっている。呼吸一つとっても、空気中の酸素を吸収しているが、その酸素は植物が光合成の作用で提供してくれていることなどいちいち意識していないだろう。食事にしても食卓に並ぶものを見れば、米・野菜や魚、肉（飼料は農作物）などいずれも自然の産物であるが、食べる時それらが生産される現場をいちいち思い浮かべるだろうか。日常的に欠かせないものに水がある。食事・洗面・風呂・飲み物・トイレなど挙げれば切りがないほど水の世話になっている。水は雨や雪によって供される自然物である。蛇口から出る水がどういうところを経て手元にきているか考えたことがあるだろうか。気づいているかどうか、水道の料金に水自体の値段は含まれていないのである。

以上掲げた例はいずれも自然の恵みである。人間の存在は自然と切っても切り離せないものだ。ところが、都市化の進展や生活様式の変化によって、自然が人々の意識や生活から切り離された存在になっている。自ずと自然の恵みという意識も薄れている。都市化が進展すれば周りの自然（農地も）は少なくなり、生活様式の変化によって家を始め自然素材を使ったものが周りから姿を消している。そうすると、若い世代はその育った環境から自然なくして人間は生きていけると思い込んでしまうかも知れない。農産物も植物工場で生産されるようになるとなおさらだ。それにしても自然素材に代わって石油製品の何と多いことか。お菓子の包み紙一つとってもビニール類が使われ、それらは皆燃えないゴミとして埋め立て処分される。自然素材は循環するが、石油製品は自然界を循環しない。

ここで「循環」という言葉が登場したが、自然界の循環とは何を指すのか、見てみたい。

「自然界の循環」というと、それぞれどんなことを思い浮かべるのだろうか。先ず思い浮かべるのは、四季の変化である。植物は春になると活動を開始し、発芽し、茎を伸ばして葉を茂らせ、花を咲かせ、やがて実を結ぶ。そして枯れるものは枯れ、葉を落とすものは葉を落とし、冬に備えつつ、春を迎える準備をする。そして、それを繰り返す。その循環は太陽の日照の変化に対応し、気温の上昇・低下の変化に対応する。古代人も春分や夏至、冬至の訪れを特に重視し、その訪れを確認する天文学的術を会得していたことが知られている。自然に即した生活をしていた先人はこの自然の循環に学び、人間も「輪廻転生（生まれ変わり）」すると考えるようになったのかも知れない。つまり人間にとっての「死」も、別れは悲しくあるけれども、ごく自然と受け止めていたのではないかと思われる。付け加えると、植物は花の蜜を蝶や蜂に提供し、受粉の手伝いをしてもらうこと、木々の新芽や実は他の動物に餌を提供し、鳥などに種を運んでもらって繁殖の手伝いをしてもらうこと、落葉は地に落ちて腐葉土となり、新しい木々の芽生えの舞台を作ること、そして、落ち葉は人間にとっては畑の堆肥ともなるし、カブトムシの幼虫誕生の場所を提供する。このように「つながり」が広がって展開する状況を指して「循環」とみることもできよう。

次に、水の循環を見てみよう。これはスケールが大きい。水は雨や雪となって地上に降り、森や田畑を潤し、表流水や地下水となって人間や動植物に必要な不可欠の水分を提供し、川を下って海へと注ぎ、水生生物を養い、蒸発して空へと上昇する。大いなる恵みの循環だ。時には人間にとって災害のようなことも起きるが、日照りが続いて水不足となればこれも大変だ。雨の恵みが平穏に訪れるよう水神様が祀られ、竜神様が祀られたのも頷けるというものだ。太陽とともに水はすべての存在にとって生存の根幹をなす自然の恵みである。それにしても、水の恵みを豊かに受けるには、山林(森)を豊かにしておかなければならない。参考までに、人間の体内の水分はどうなっているかを見ると、体重に占める割合は、子ど

もで70%、成人で60～65%、老人で50～55%だそう。そのうち細胞内液が体内水分の3分の2を占め、血液やリンパ液などの細胞外液が3分の1を占めると言われる。自然の恵みといえ、太陽光、水力、風力、地熱、木質バイオマスを生かした自然エネルギーをもっともっと活用すべきと考える。石炭や石油も元を辿れば自然の恵みだが、いかんせんエネルギーに使えばCO₂を排出する。クリーンで再生可能な自然エネルギーを活用する道を拡大すべきと思う。日本は世界に立ち遅れている。地球温暖化がこのまま進行すれば、自然の恵みを後世代に継承できなくなってしまう。そういう愚は犯したくない。原子力発電も自然との関係では、自然の対極にある。核分裂によって自然界に存しない放射性物質を生成し、その放射性物質は生物の細胞を破壊し、核廃棄物の高放射性物質は無害化できず、地中深く埋設し、自然減衰するのに10万年かかるといわれる。こういうエネルギーを使い続けることは後世代に負の遺産を遺してしまうので止めるべきと思う。

先程もふれたが、人間が自然を意識しない環境のひとつに、自然素材を使ったものが身の回りにないことがあげられる。家屋でいえば、家の造りが和風で、木のぬくもりが感じられたり、障子や畳の感触が得られ、日常用具として木製品が使われていたり、という経験があれば違うが、残念ながらそれは叶わない。木の感触を味わって、その木がどういう種類でどこのどんな山から伐り出されて来たのか想像してほしいと思ってしまうのだが。自然素材として我が家で記憶にあるのが竹細工である。父が箆(ざる)・箕(み)や籠(かご)などを作っていたのだ。田んぼでドジョウを捕るために夜仕掛ける竹細工も作ってもらった。また父に連れられて、竹細工に使う篠竹を採りに結構遠くまで行った記憶もある。

もう一つ、自然素材といえ「草木染め」がある。草木を使った染物だが、歴史的には白鳳時代に最も盛んに行われて、染物の色の種類が何と400種を超えていたそう。それらは陽の光に映えるきれいな色合いをみせていたという。しかし、現代に受け継がれているものはわずかしかなければならないとのことだ。「藍染(あいぞめ)」もそのひとつだが、江戸時代に最も盛んで、現在は徳島県が産地として有名だ。藍の栽培、藍の葉を発酵させる工程から藍液をつくり、染に至る工程は大変な時間と手間がかかる。テレビで見たことがあるが、藍の葉を発酵させるときの作業は繊細で、並々ならぬ手間をかける、伝統の技である。それによって「藍染」という価値ある染物ができあがるのだ。伝統の技は「自然素材の声」をよく聞くところに秘訣がある。いわば「めんどくさい」ことが避けて通れないのだ。それにしても、人間は自然のもつ価値をどれだけ知っているのだろうか。土地価格ひとつとっても宅地の方が山林より高い。経済的価値からいうとそうなるのだろう。だが、最近「自然資本」という概念が打ち出されて、山林の果たす役割(酸素の提供・水のダム・防災)からその持っている価値を見直そうという主張だ。木材の価格も低迷している。本当は伐期到来まで何十年と果たした役割がそこには見逃されている。経済的価値のみでは計られないものをきちんと評価する視点は環境問題解決に不可欠であると思う。

「人間は自然の一部である」という言い方がある。自然と共生しないことには人間の生存もありえない。それを忘れてはならない。都会の人々が自然を求めて(レジャー感覚でも)山や海、景勝地に出かけるのは、なぜだろうか。小生が思うのには、それは心中にあるシグナルが発せられるからではないだろうか。つまり、縄文のDNAだ。それがあから無意識に自然を求め、そこで安らぎを覚えるのではないだろうか。このDNAを目覚めさせ、自然と共生する意識にまで行き着く人の多からんことを期待して、今回の稿を終わる。

九州 11 山 一人旅

【プロローグ】

山旅遊人として「ねじりはちまき」に寄稿を始めたのは、平成 21 年 2 月のこと。その後 NO62 で「ひとやすみ」し、平成 26 年 9 月に登った白馬岳の「日本百名山 達成 NO65」の後は休んでいました。

今回、再び書き始めます。主に「日本二百名山」と「日本三百名山」に登ることを書きます。毎月は登れないかも知れませんが。

去年は群馬・長野・新潟・山梨・静岡・岐阜の県境の山など 27 座を登り、昨年末の時点で約百山を残すところとなりました。達成できるか、あと何年かかるか、自分の健康との戦いでもあります。

私のモットー「アンチ・エイジング」＝「加齢による肉体的・精神的な様々な弱体化事象に抵抗すること」の気持ちで取り組みます。

「年取ってたまるか」ワアオー！！

今回は、去る 3 月 17 日から 28 日に、夜行バス 1 泊、九州 10 泊で取組んだ、「九州 11 山」について報告します。

【今回登った山の概要】

(登った日程順◎は日本二百名山、○は日本三百名山)

- 1 桜島 (◎さくらじま、鹿児島市、北岳(御岳)1117m、中岳 1060m、南岳 1040m。登山規制のため湯之平展望所 374mまで)
- 2 高隈山 (○たかくまやま、鹿児島県垂水市、大の柄岳おおのがらだけ 1236m)
- 3 国見岳 (○くにみだけ、熊本県・宮崎県境、1739m)
- 4 市房山 (◎いちふさやま、熊本県・宮崎県境、1721m)
- 5 尾鈴山 (◎おすずやま、宮崎県、1405m)
- 6 大崩山 (◎おおくえやま、宮崎県、1643m)
- 7 由布岳 (◎ゆふだけ、大分県、1583m)
- 8 鶴見岳 (○つるみだけ、大分県 1375m、由布岳の隣の山)
- 9 背振山 (○せふりやま、福岡県・佐賀県境、1055m)
- 10 多良岳 (○たらだけ、佐賀県・長崎県境、996m。経ヶ岳 1076m)
- 11 雲仙岳 (◎うんぜんだけ、長崎県、普賢岳ふげんだけ 1359m。平成新山 1483mは登山規制)

【1 日目】 3/17 (土) 郡山での 19 時からの同級生仲間との飲み会で今回の山行について卓話したら 15 人からカンパがあった。

郡山駅前発 21:00 近鉄ギャラクシー号

【2日目】3/18(日)

京都駅八条口着6:23、新幹線のぞみ・さくらと乗り継ぎ鹿児島中央駅着
11:29

○トヨタレンタリースにて車レンタル

＊送っておいだ着替えの詰まった70リットル大型ザックを受け取る。

○桜島フェリーにて桜島へ(航行時間15分)

【桜島】

○下船後、スタート地点の愛宕杵聞神社(あたごひらききじんじゃ)に向かう。車を置き、神社から目標地点の湯之平(ゆのひら)展望所まで観光道路を歩き、下りは反対側の桜州(おうしゅう)小学校まで歩く。歩行時間3時間。途中、英語圏外国の女性一人を含む若者5人のグループと前後する。

○展望所から御岳方面を望むが噴煙か霧がかかり上部は隠れていた。観光のお客さんがバスやレンタカーで50人ほどが入れ替わり訪れている。先ほどの外国の若者が売店でカップラーメンを食べながら声高に話していた。自分は鹿児島名物“南国白くま”というアイスクリームを食べる。

○桜州小学校まで下る途中のカーブに「降灰時スリップ注意」の標識が立っている。バスが通った後は昔の砂利道のように灰の埃が舞い上がり、道路沿いの木々は薄汚れている。タクシーを呼んで神社まで戻る。

○下山後錦江湾を右手に見ながら垂水(たるみず)市に向かう。裏側から見る桜島はモクモクと黒っぽい噴煙を上げていて音がないのがかえって無気味だ。

○翌日のため、宿所から10kmほど先の県道から登山口に至る大野原林道分岐を確認する。

○宿泊所 ファミリーロッジ旅籠屋(素泊まり:歩いて7~8分の食堂で食事)

【3日目】3/19(月)

【高隈山=大の柄岳】

○宿所を薄暗い6時前に出てコンビニで朝、昼食を用意する。大の柄岳登山口に着いたら雨が降ってきた。カッパを着込んで6:50樹林帯の中をスタート。

○大野原林道垂桜(たるざくら)コース往復

広葉樹林の中は雨も弱い、スズタケの尾根筋に出ると風と雨が強まる。傾斜が急なところでは滑って何度も転びそうになった。雨風の山頂からは何も見えず山頂の標識と一緒に自撮りしすぐに下山する。

○計4時間、眺望なしの雨の山行だった。

○下山後、宮崎県椎葉村(しいばそん)、国見岳登山口近くの宿所まで移動。

一部高速を使い、約200km、移動に約4時間を見込んだが、本県の檜枝岐村と同じ平家の落人集落といわれる椎葉村は全村が山々に囲まれていて幅員の狭い峠道を延々と走り山々を越えて宿所に着くまでに6時間を要した。そこ

は熊本県との境の山村で、曲がりくねった急流の川、急傾斜の斜面沿いに張り付いた集落で、宿所手前の坂道のカーブでは車の底を擦るような道だった。
○76才のご主人に、翌日の登山口近くまで、軽トラで案内して貰った。

○宿泊所 民宿又一 椎葉村尾向地区耳川沿い（2食+昼食おにぎり）
築150年は越えているという柱・梁の太い母屋の30畳位の広間で食事、客は自分一人。女将さんの作ったイワナの甘露煮や椎茸の煮物などは食べきれないほどで、味なども全く違和感はなく南会津の民宿にいるような感覚だった。

【4日目】3/20（火）

【五勇山・国見岳】

○宿所（車）萱野（かやの）登山口～五勇山～国見岳往復
参考コースタイム（休憩含まず、以下同じ。）：登り3時間40分、下り3時間5分、計6時間45分 → 実際は、休憩を含めて8時間かかる。

（6：00宿所発、登山口6：50スタート。14：50登山口着）

○曇り、草や笹が被さっている登山道は前夜の雨で濡れていて、カッパを着込んで出発。すぐに5m幅くらいの増水した沢を徒渉する。足が滑って10cmほど水没するが、カッパとスパッツのおかげで靴の中までは濡れない。登山道は倒木が多くもやがかかっている幻想的な風景。山頂近くには雪が残っていて踏み跡もなく一時目印を見失い時間を浪費する。

○山頂には立派な石造りのお宮があり、直下はしゃくなげの群生地。咲く時期は見事だろう。国見岳という名は見晴らしが良いことから名前というが、雲の中で下界の眺望はなく、宿のおにぎりを食べていたら、雪になったので、早々に下山にかかる。慎重に踏み跡と目印をたどる。

○下山後西米良村（にしめらそん）へ移動。ナビタイムでの事前調査では、椎葉村役場から西米良村役場まで42.2km、1時間20分。

○しかし、役場から送って貰った地図や概念図では距離が短く見えるが、ナビでは、幅員、高低差やカーブの多さなどはデータ化されていないのか、雨降りでもあり、ナビよりも多く時間がかかり、西米良村の宿所まで約3時間を要した。暗くなってきて予定していた登山口の確認はできなかった。雨が本降りになってきたので明日の山登りができるかどうか危ぶむ。翌日判断することにする。

○宿泊所 米良の宿 富士屋 （2食）

村中心部の宿には、団体の宴会が入っていた。翌日の天気予報は午前雨、午後曇り。

【5日目】3/21（水）

【市房山】

○朝から雨がやんだり、強くなったり。判断を先延ばし様子を見る。雨がや

み、9:50 宿所発。舗装路を五合目下駐車場に着くが、登山らしいワゴン車が林道をさらに登って行ったため後を追ってみる。未舗装の専用林道に入るが、ワゴン車の姿を見失い、あきらめてUターンしようとしたら、左前輪が道路からはみ出し、泥濘にはまって動かなくなってしまった。冬タイヤでも四輪駆動でもないためニッチもサッチも行かなくなり、エンジンを吹かす度に深みにはまっていく。宿か役場に救助を呼ぶことさえも頭をよぎる。

○少し冷静になって考える。

はまったタイヤの下にいくつかの小石を押し込み、ギアをバックにいれ、車の外から右手でハンドルを握り、左手でアクセルをバーンと押したら車が動き道路上に上がった。素早くハンドブレーキを引く。瞬間的な動きだった。ホッと、荒い息を吐く。なんとか自力で脱出できた。

○一仕事を終えた感じで疲れてしまった。自宅近くの山だったら、登らずに帰ってしまうところ。ここは九州、帰るわけにいかない。

○結局五合目下駐車場に戻り、30分遅れの11:00にスタートする。15分ほど山道を行くと林道に出て、さらに行くと林道終点に無人の山小屋があり、レンタカーのワゴン車が停まっていた。やはりここまでは来られたのだ。片道30分得する計算だ。

○杉や檜の植林地を過ぎると時々青空が見えてきたり、ガスったりする。ブナやナラの大木の林を抜けた山頂まで5分の標識のところで、下ってくる6人のパーティと出会う。

桜島を除き、高隈山、国見岳、と誰にも会わず、山で初めて出合った人達だったので、どちらからおいでですかと聞いたら、返事はなんと、福島市と宮城県白石市からという話で、しばし盛り上がった。男2人に女性4人の熟年のグループで、今日は鹿児島島の指宿（いぶすき）に泊まり明日開聞岳（かいもんだけ日本百名山）に登るとのこと。互いに山行の安全を祈念して別れた。

○市房山山頂では晴れ間が多くなり、写真を撮ったり久しぶりにゆっくりする。

○往路を下山、15:30に登山口に着き、高速道を使い宮崎県都農町の宿所へ移動。

○参考コースタイム：登り2時間10分、下り1時間30分 計 3時間40分
→ 実際は、休憩も入れて4時間30分かかった。

○宿所に18:30着（参考ナビタイム：西米良村役場～宿泊所 67.6km、1時間34分）

○宿泊所 ホテルA Z 宮崎都農店 （2食）

大分市に本社を置く九州を主なエリアとするチェーン店。

【6日目】3/22（木）

【尾鈴山】

○朝起きると、気温は低く空には雲が残っているが朝焼けがきれいで天候が良くなるのを感じる。6:00 からバイキングの朝食を取り登山口に向かう。ホテル A Z (13.4 km、19 分) 尾鈴キャンプ場駐車場

○白滝など瀑布群を通るコース

所要時間の短い一般コースもあるが、「南東に大小 30 を越える滝があり、名勝指定された、国内唯一の瀑布群」と都農町の登山マップに紹介されているので、瀑布群を通るコースを選ぶ。

参考コースタイム：登り 2 時間 40 分、下り 3 時間 35 分 計 6 時間 15 分
→ 実際は、休憩も入れて 8 時間かかった。結構大変だった。

○7:00 スタート、尾鈴林道を 4 km、1 時間歩く。落石がゴロゴロしていて、雨で一部荒れているところもあり、車高の高い四駆車でないと無理で、レンタカーを乗入れたら、途中で立ち往生するところだった。大小様々な形の滝を眺めながらの歩きで、水量と音の迫力がすごい。

○登山口からは、モミや照葉樹林の尾根道はしっかりしているが結構な急登でジグザグに登っていく。九合目を過ぎるとツツジの木が樹氷になっていた。前夜は山頂付近が雪になったらしい。尾鈴神社の小さな上宮の周りが樹氷とまだらの雪模様で、風情のある良い雰囲気である。

○山頂は少し広い広場になっていて周りの木々の樹氷がきれいで、風もあり雪が時折斜めに流れていく。

○山頂から尾根道を下るが、風が吹き付ける尾根の右側の樹林がまるで桜が咲いたように帯状に白っぽく見える。時間の経過で溶けてしまう一時的な風景で今ここにいる者のみが見ることのできるもの。

○白滝までの下りが長く大変だった。白滝は高さ 75m あり樹々に囲まれた狭い青空から降りてくる様は水量が多く迫力があつた。

○大小の滝を眺めながらのトロッコ道(※)は傾斜こそ緩やかだが大小の石がゴロゴロしていて歩きにくく 5 km 以上の歩きは疲れた足腰に応えた。

(※) 明治 42 年から作られ昭和 33 年に撤去されるまで最高海拔 800m、総延長 50 km に及ぶと説明板に書かれていた。

○季節外れの山行では人に出会わないことが多い。尾鈴山山行では、駐車場で一人、下山の際山頂直下ですれ違った一人の 2 名と話したのみ。一人山行を続けていると声帯が退化してしまうのではないかと時々恐れている。

○15 時駐車場着。15:30 発、大崩山(おおくえやま)祝子(ほうり)登山口へ移動
宿泊予定の女将さんから電話があり、当初通行を予定した林道が土砂崩れで通行止めになっていて、別の県道を利用することとのこと。ありがたい。

○所々待避所のある県道 207 号線を通る。(ナビ: 86.5 km、1:43) 山の崖と曲がりくねった川に挟まれた道は舗装されていても時間がかかる。

○18 時前宿所の茶屋に着き、60 代の女将さんに聞き、暗くなる前に登山口を確認する。

○宿泊所 大崩の茶屋 (2 食+昼食おにぎり)

10 畳くらいの一間 (しかない) に泊まりは自分一人だった。川の方に 15m くらい下った所の外風呂を沸かしてくれた。

○食事後、大学ノートの宿帳に記帳する。なんと直前の宿泊は 2/14、15、あのグレートトラバースの田中陽希だった。鉛筆書きで名前と神奈川県が記載されていた。スタッフは延岡市にいて自分一人で泊まったとのこと。撮影のために、天候が悪く 2 泊したとのこと。

【7 日目】 3/23 (木)

【大崩山】

○今回の九州 11 山のメインの山で、地元資料には次のように書かれている。

＊岩場、急峻、ガレ場等の難コースで、予想以上に時間がかかる。十分余裕を持って、日帰りでも“ヘッドランプ”“雨具”“非常食”等を忘れずに持参のこと。九州で一番危険な山。

○(参考コースタイム) 登り：祝子登山口から 4 時間 40 分、

下り： 2 時間 50 分 計 7 時間 30 分

→ 実際は、天気が良かったのでゆっくりと山登り、岩登り、徒渉を楽しんだことから休憩も入れて 10 時間かかった。結構大変だったが変化のある山で充実した達成感のある山行だった。

○4:30 起床、5:30 朝食、6:00 宿所発。登山口を 6:50 にスタートする。

事前に数種類のガイドブックやインターネットで下調べをし、また前夜に女将さんから地元の人を作成した概念図で説明を受けていた。

○しかし、資料を読んで想像するのと現場はかなり異なる。自分の想像力は平板で貧弱で、平地でのものの考え方に捕らわれている。

○早速、登山口から 30 分の山小屋の前の分岐点が見つからずうろついてしまった。後から登ってきた、女性一人を含む若者 8 人のメンバーに追い越されてしまう。後で聞いた話では、片腕に障害のある人を囲んで、地元のガイドさんが 3 人付いての山行だったとのこと。

○大崩山は登り下りで 40 以上のはしごがありロープもたくさんあった。つかず離れずこのパーティと途中まで行動を共にできて良かったと思う。自分一人では“ワク塚”という三つの大きな岩場の登り方が分からず頂 (いただき) を踏まずに終えていたかも知れない。

○ところが上ワク塚の頂で話していたら、彼らは大崩山の山頂には行かないことが分かった。山頂までの山行は単調で面白くないからとのこと。

○これには焦った。彼らにペースを合わせ、いつまでも一緒にいては山頂を踏

めないことになる。確かにガイドさんが付いていてもペースがだんだんゆっくりになってきていた。自分は疲れなくて助かったのだがこれでは日が暮れてしまうと気がついた。

○上ワク塚で別れて山頂を目指す。途中一端下り、緩やかな広い登りで道を見失うが尾根に出れば良いだろうと見当を付けて登ったら道に復帰できた。割と平坦な尾根筋の道をハイペースで歩き、山頂に着く。確かに樹木に遮られて眺望はあまり良くない。おにぎりを食べて休憩。

○山頂手前の岩場からは周りの名前の分からない山々が見渡せた。

○小積ダキという、午前中に頂に登った上、中、下のワク塚（岩峰）の展望所みたいところで8人のパーティに追いつく。坊主尾根という丸い岩峰が積み重なりながら標高を下げている下山道の途中で先行させて貰う。

○最後の難関は幅 30m以上ある川の徒渉で、前日までの雨で水かさが増して流れても速い。もし川に落ちてずぶ濡れになっても、30分も歩けば車に着けるので、その時はその時。と自分を納得させて、ストックを長くし、大きな岩やかろうじて顔を出している石を伝いながら、慎重にかつ気合いを入れて渡ったら大丈夫だった。

○下山後別府市に向けて移動

17時、林道が通行止めのため前日に通った県道 207 号線で延岡まで戻り遠回りになる東九州道を経由して移動する。

○宿泊所 野上本館、素泊まり。着は 20 時近くになる。

別府市北浜の賑やかな夜の町で、「3 の付く日ビール半額」との看板につられて焼き肉屋で食事する。宿で温泉（重曹泉）につかり就寝。

【8日目】3/24（土）

○疲れていても 6 時前に起きてしまう。別府は雲一つない青空でまぶしく、気温も高い。絶好の登山日和だ。

しかし前日、メインの大崩山を終わったことから、二日酔いというか少し虚脱状態になり疲れもたまっていて“山に登る”という意欲がわいてこない。

○別府は昨年 2 月に仕事で 2 泊して以来 1 年ぶり。前回見学だけして入ることはしなかった“竹瓦温泉”に行くことにする。

○竹瓦温泉は明治 12 年創設で、現在の建物は昭和 13 年に建設されたもの。豪華な屋根と建物は趣がある。6:30～営業。別府市営で料金は 100 円。既に 3 人のお客さんが入っていた。

○由布岳一つだけでも登っておかないと日程がきつくなるので、登山口に向かう。宿所発（17.5km、27 分）由布登山口バス停駐車場 10:15 着

【由布岳・鶴見岳】

○10:30 正面登山口ルート発、「由布登山口 標高 780m」の標識あり。豊後富士

とも言われる双耳峰の由布岳は紺碧の空をバックにくっきりと優美な姿を見せている。土曜日のせいか多くの登山客が三々五々登っている。

○（参考コースタイム）登り：東峰まで 2 時間 50 分、

下り：東登山口まで 1 時間 50 分 計 4 時間 40 分

○自然林の中の整備された道を単独行の若者と前後しながら、ジグザグの道を上ると予定より早く西峰と東峰の分岐、火口壁の「マタエ」に着く。由布岳は下からの眺めは裾を引く優美な姿であるが、マタエから上部は二つの峰を持つ火口のある火山岩の荒々しい山である。

○まず由布岳最高峰、西峰 1584m を目指す。「カニノヨコバイ」や鎖場をよじ登った山頂は 360° の眺望が素晴らしい。こびろい山頂では 30 人くらいの高校生の男女がカラフルな服装で賑やかにカレーライスを作って食べていた。

○この時点では、鶴見岳までやるかどうかまだ決めかねていた。時間的にも 13 時になっているので日没まで下山できるか分からなかった。

○マタエまで降りて東峰 1580m を目指す。こちらは鎖などもなく多くの人が登っている。遮るもののない山頂からは遠くうっすらと、かつて登った九重連山の山並みが見える。天気良すぎて遠くは霞んでいる。

○西峰からお鉢ち巡りをして東峰にやって来る人たちがいた。ここで自分はやはり予定通り鶴見岳をやろうと思い、東口登山口（＝鶴見岳西登山口）に下山する。既に 14 時。最後はヘッドランプを使うこともやむを得ないと覚悟を決める。

○雪が残り、所々ロープもある東側の急な斜面を降りる。踏み跡もあるがこの時間こちら（東登山口）から登ってくる人はいない。

○1 時間で由布岳東登山口に着き、道路を挟んだ鶴見岳西登山口でバナナと牛乳で腹ごしらえをし鶴見岳に向かう。既に 15:15 を過ぎている。

○目印をたどり 17 時前鶴見岳山頂に着く。山頂に NHK の巨大アンテナがある。西方には先程下山した由布岳が黒々と逆光の中に鎮座している。

○バスの時間が気になったが、下山には歩くとバス停まではさらに 1 時間かかる。スピーカーで 17 時発のロープウェイが間もなく出発するアナウンスがあったので駅まで急いでみたが間に合わなかった。次は 17:30 発が最終とのこと。駅舎内には韓国人と思われる観光客が大勢いた。

○駅の人にバスの時刻を確かめたら最終ロープウェイでは 1~2 分の差で間に合わないとのこと。潔くバスはあきらめて、タクシーの手配をお願いした。

○ロープウェイ下車後タクシーで由布登山口バス停車場に向かう。駐車場には自分の車だけが残っていた。

○青空を背に暮れなずむ由布岳の黒いシルエットと九重連山に沈む夕日がきれいだった。

○食事は宿で教えて貰った近くの食事処に向かったが2軒が満杯で断られた。
自分の入った焼き鳥メインの居酒屋も混んでいて、入口脇の端っこの席に座ってから頼んだものが出てきたのは30分も経っていた。

○宿泊所 湯布院 シティホテル ビッグベア (朝食)

【9日目】3/25 (日)

○前日24日に由布岳と鶴見岳を一日で登れなかった場合の調整日と考えていたが、結果的には登れたので、佐賀・福岡県境の背振山に登るため移動する。

○移動 大分道湯布院IC～長崎道東背振IC経由、約120km 1時間30分

○移動の途中で、翌日予定の黒木民宿キャンプ場の宿泊をキャンセルする。

【蛤岳・背振山】

○背振山には自衛隊のレーダー基地があるため山頂直下まで車で行けるが、それでは山登りにならないので、次の行程の都合(翌日の佐賀・長崎県境の多良岳登山)もあるため佐賀県側から登ることにした。

○(参考コースタイム) 坂本峠～蛤岳(はまぐりだけ)～背振山往復 計6時間

○坂本峠登山口はナビでは出てこないで、手前の道の駅で聞いてみたが、

「この辺が坂本峠です」という返事だった。自分の勘を頼りに狭くカーブの多い旧道をゆっくり登っていくと、登山口の標識のあるホントの峠に着く。

○10:10 スタート。1時間ちょっとで蛤岳につく。蛤岳という名前は、山頂にある蛤岩が平たくて丸い岩の真ん中に割れ目のある岩で、確かに貝の蛤に似ている。蛤岩に登ってみたが、有明海や雲仙岳は霞んで良く分からなかった。山頂手前にある音を立てて流れる蛤水道は江戸時代初期に佐賀藩が行った治水事業で今はコンクリートになっている。

○このコースは九州自然歩道の縦走コースとなっていて整備されており危険箇所はなかったが、自衛隊基地の近くの沢の手前で目印の布切れを見失った。周りを見たら右上の方にはしっかりとした赤い布切れがあったので登山道の目印と勘違いし、急な所を登ってしまったが、行き止まりとなり引き返す。これで30分間を浪費した。「赤い布切れ」も良く判断しないと、登山道の目印ではない場合があるので注意を要する。これまでも何度か間違ったことがあった。土地所有の林界の印だったり、工事などの際目の印だったり。

○所々雪の残る杉の植林帯や広葉樹林の自然林には笹が繁り歩きにくい所もある。雪で滑りやすい木道を越えると駐車場に着く。

○そこから自衛隊の鉄柵に沿って10分ほど階段を登ると巨大なレーダードームを背にした石のお宮(背振神社上宮)が背振山山頂だ。14:00着、約4時間の道のりだった。見渡す尾根一体は航空自衛隊のレーダー施設で、歩いてきた九州自然歩道の雰囲気とは相容れないものだ。

○往路を戻り、17:50坂本峠着。標識によると片道8.4kmとなっている。参

考コースタイムは6時間、自分は7時間40分かかった。

- 宿泊所 ホテルA Z佐賀吉野ヶ里店（2食） A Zは都農町（尾鈴山）で21日にも使っているので安心。部屋の作りや食事の内容も全く同じだった。あたりまえだが。

【10日目】3/26（月）

- 由布岳と鶴見岳を1日で登った場合は吉野ヶ里遺跡などの観光にあてる予定だったが、今回は山優先とし観光をあきらめ、予定を1日繰り上げて多良岳に登ることにする。

【経ヶ岳・多良岳】

- 6:30 宿所を出て、高速を使い約100km、8:30 登り口の長崎県大村市黒木民宿キャンプ場に着く。大きな構えの民宿に寄り 30%のキャンセル料 1,200円を支払う。女将さんは70代半ばくらいの上品な人で、食事を作ることはやめキャンプと素泊まりだけ受け入れているとのこと。

- （参考コースタイム）黒木登山口～経ヶ岳～多良岳～金泉寺～黒木登山口
計6時間45分

- 9:00 駐車場スタート。緩い登りの狭い農道の右側には、石積みの細長い棚田になっていて、小さなトラクターで耕運している人もいた。上に行くにつれて、棚田（畑）は荒れて雑木が繁り耕作放棄地となっていた。10㎡くらいの屋根のない石積みの室（むろ）みたいなものが5～6箇所あった。

- 山道に入り大小の岩が折り重なった樹林帯の中のガレ場をジグザグに登り、2時間で多良山系の最高峰経ヶ岳 1076mに着く。つばのないキャップをかぶりタイツに短パン姿で小さなザックを背負った男性が先着していた。話したらトレイルランニングで登ってきた59才の人だった。互いに写真を撮りあう。天気良くカラスがカーカーとのどかである。周りの山は古い山塊らしく雰囲気のある山が重なりあい連なっている。

- 間違いではないかと思うほど大きく下り、谷の向かい側を登り返して尾根に出て、鳥居をくぐり階段と鎖場を登ると立派な石造りのお宮のある多良岳山頂に着く。14:00、5時間の道のりだった。

- お宮は和銅年間に開かれたという多良岳権現。尾根続きの国見岳からの眺めが良いが山々は霞んでいる。

- 少し下った所には真言密教の立派なお寺がありお参りする。空海建立の高野山真言宗金泉寺とのこと。隣に山小屋があったが月曜日で管理の人はいなかった。

- 下山 16:00 駐車場着。結局7時間の山行だった。

- 雲仙温泉の宿所に移動（ナビタイム 61.6km、1時間33分）カーブの多い山道で時間がかかり買い物もしたので18時を過ぎる。

- 宿泊所 コンドミニアム雲仙よか湯 温泉付、素泊まり。

日帰り温泉も経営する長期滞在型の湯治場的な宿。受付の女性に聞いたら宿泊は自分の他には1ヶ月位滞在している70才代の男性一人のみで、20時から翌日8時までは従業員は不在とのこと。歩いて10分くらいの雲仙温泉街に食事処があるとのことだったが、暗くなりかけていたこと、疲れて歩きたくなかったことから、女性の勧めで、滞在客のために販売している冷凍の焼き餃子とハンバーグを買い、レンジで温めてくれた。松茸入りカップラーメンなるものは部屋でお湯を沸かして食べる。持参の小さなサバ缶も開け翌日の資料を読みながら500ml缶ビール2本を空ける。

温泉は白濁した泉質で、足の筋肉をもみほぐし翌日の11山目、九州最後の雲仙岳登山に備える。

【11日目】3/27（火）

【雲仙岳：妙見岳、国見岳、普賢岳】

- 島原半島の中央部に位置する雲仙岳は、妙見岳、国見岳、普賢岳（1359m）の主要三峰ほかの総称とのこと。しかし1990年から95年にかけての火山活動により新たに1483mの平成新山が出現し、雲仙岳及び長崎県の最高峰となったとのこと。平成新山は登山規制なので、今回は主要三峰を登る。
- 仁田峠駐車場（標高1080m、宿所から8kmほど）まで行くには8:00の料金ゲートが開くまで待たなければならないので、仁田峠駐車場まで歩いて30分かかる妙見駐車場から登り始めることにする。
- 4:30にアラームをセットしていたが少し早く目覚めてしまった。やはり緊張している。昨夜の残りもので朝食とし、まだ薄暗い5:30に宿所を出るが、前日に妙見駐車場の場所を確認する余裕がなかったので、行ったり来たりうろうろして時間を浪費した。散歩をしていた熟年のペアに尋ねてみたが日本語が通じなかった。15分もかからずに行くところが50分もかかってしまった。やはり事前の確認が大事だ。
- 6:40に妙見駐車場をスタートし30分でロープウェイ乗り場のある仁田峠に着く。車も人もいない観光地の駐車場は余計に広く感じる。
- ミヤマキリシマの群落の中を妙見岳に向かう。花の咲く時期は見事だろう。後ろを振り返ると仁田峠（駐車場）の向こうの山々がスッキリと見え、島原湾が霞んで見えている。
- 妙見神社の裏手の妙見岳は土砂崩れで行けない。鎖場のある岩場の国見岳でパンを食べ休憩する。東に見える平成新山からは5カ所以上から噴煙が上がっている。早朝の逆光により黒々ゴツゴツした山容は無気味で“魔の山”のようだ。
- 国見岳からかなり下り2012年に開通した鬼人谷コースに行く。風穴が何箇所かあってきちんと解説がなされている。

○平成新山の溶岩の壁が間近に迫っているところには入山禁止のロープと看板が立っている。

○普賢岳山頂からは噴煙を上げる平成新山の溶岩ドームが間近に見える。
整備された下山道を下り仁田峠に 12:25 着。売店で記念のバッチを買い妙見駐車場まで往路を下り、約 6 時間半の山行を無事終える。

○参考コースタイム

仁田峠～妙見岳～国見岳～鬼人谷(きじんだに)入口～普賢岳～仁田峠

計 4 時間 45 分+妙見駐車場との往復 50 分=5 時間 35 分

【エピローグ】

○下山後島原城を見学し、島原港から 17:50 発のフェリーで熊本に渡る。航行時間 60 分。霞む雲仙岳を背景に海猫がフェリーの周りを飛び交い、航跡が夕日に金色に輝く。ビールでも飲みたいところだが、レンタカーを返すまではお預け。

○レンタカーを返し、70 リットルザックに洗濯ものを詰めてホテル(東横イン)に宅急便をお願いし、一段落したのは 20 時を過ぎていた。

○食事は熊本駅に新装開店して 10 日経ったばかりの飲食店街にて。20 店舗くらいあるどこの店も混んでいて、回転の早そうな焼き鳥がメインの店で 20 分ほど立ち待ちしてようやく座り、最初の一杯のビールは美味かった。

【12日目】3/28(水)

○2 年前の 5 月の連休後半に九州の山に登ったが、熊本・大分地震の影響で当初予定していた由布岳と鶴見岳は入山禁止で登れなかった。その時の地震で大きな被害を受けた熊本城の被災と復旧の状況を見たいとかねて考えていた。

○市電で熊本城・市役所前まで行き、城の中には入れないので正門前から反時計回りにお城の外側を一周した。たくさんあるさくらは満開で、特に加藤神社のさくらが素晴らしかった。天守閣は屋根や周囲の板塀が取り払われてスカスカで天守閣の面影はなく、巨大な紅白のクレーンが動いていた。

○城のあちこちで崩れた石垣や建物がまだ手を付けられないままだった。満開のさくらとのコントラストが無残だ。アジア系の観光客がほとんどだった。

○駅で「島原地鶏弁当」と缶ビールを買い、11 時過ぎの新幹線さくらに乗る。

当初の予定より 1 日早く、夜行バス 1 泊、九州 10 泊の山旅を終え帰途につく。

○自宅着 20 時。

<会社近況>

4月に入りました。

暖かい日が続いていますね。(*^_^*) 4月は「卯月」といいます。
この頃、卯の花が満開になることから、この名が付いたようです。

暖かい日が続いたせいか、桜もあっという間に満開になり散ってしまいました。
桜は散りましたが、菜の花が咲き、家々の玄関先にはチューリップ、ムスカリ、スイセン、パンジーなどの春の花が咲き、畑ではくきだち菜が育っています。よい季節になりました。

☆☆☆お知らせ☆☆☆

4/30(月)…「昭和の日の振替休日」お休みさせていただきます。

☆☆☆5月連休のお知らせ☆☆☆

5/3(木)～6(日)まで、お休みさせていただきます。



おいしい♥4月

「くきだち菜」

食物繊維が豊富で、腸内の悪玉菌を減らす働きをします。ビタミンCやカルシウムも含まれており、体にいいお野菜です。

おすすめはやはり「お浸し」でしょうか。香りが楽しめます。
シンプルにお醤油でいただく他、だいこんおろしとポン酢でいただいても、さっぱりとしておいしいです。お味噌汁の具材にしてもいいですし、卵とじゃバター醤油炒めも合いますよ。
色々なお料理が楽しめますね。

平成30年4月5日発行

有限会社 幸田建設

<発行責任者>

幸田久美

〒969-1204

本宮市糠沢字八幡1-1

電話0243-44-3816

<後記>

山旅遊人さんが再度登場！です。
様々な地で山行をされており、その様子を寄稿していただくことになりました。(*^_^*)

今月号よりお世話になります。皆様、
どうぞお楽しみ下さい。(事務員k)